
電話

座布団猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電話

【Nコード】

N0502M

【作者名】

座布団猫

【あらすじ】

電話が鳴った。だけど誰も取ろうとしない。
一本の電話を巡るちょっとした会話。

R R R R R ……

電話のベルが鳴り始めた。

時間を見れば10時前。昼ではない。もちろん夜の10時だ。

ダレダヨ。コンナジカンニ…

上目使いに電話を置いてある場所を見ると、父さんは読んでいる新聞から少し顔をあげただけで、あとは知らん振り。

鳴り響く電話のすぐ近くに居るのに、手を伸ばすどころか気にすらしていない。

見習うべきは親の後ろ姿。言っていたのは……社会を担当する担任だったっけか？

まあ、そういうことで。オレも父さんを見習って、知らん顔を決め込むと手にしたWJを読むことにした。

3回…4回…

でも、気になる。

放っとくつもりだったけど、今の調子だと鳴りやむまで誰も出ないだろう。

急用かもしれないから、オレはドアを開けて和室に居る母さんを呼ぶことにした。

「母さん、電話！ お母さん…！」

大声で呼ぶとパタパタ……軽やかに、とは言い難いスリッパの音をさせて母さんが廊下を走ってきた。

「何よ、近くにいらんだったら、あんたがとればいいじゃない！」

ジロリ。睨んで文句を言ってきたながらも、その手はしっかりと受話器に伸びている。

「はい、お待たせしました。松林でございます。」

半オクターブほど上がった　よそ行きの用の母さんの声。
この声に、オレの友達はずっかりだまされている。

『貴久、おまえんちの母親、優しそうでいいよなあ…』

『若いんだろ？』

『……ああ……まあ……』

訊かれたオレはいつも曖昧に答えてその場を誤魔化している。

何度が繰り返してきたやり取りを思い出したオレは目を閉じた。

うん、確かに目を閉じて、声だけ聞いていると、若い。

優しい？……うゝん、問題は無いわけではないが、優しくないわけじゃない。

いつもは、のほほんとしているし。

あ、でも……たまにやってくる嵐！

オレや弟を怒鳴りつける時の声は、そこいらの半端なもんじゃない。
い。

きつい言葉を吐かれるわけじゃないけど、なんていうか、声が響くんだよな。

さすがに昔、父さんと結婚する前は局に勤めてたのは伊達じゃないって事かな？

「貴久ですか？少々お待ちください。」

保留ボタンを押した母が振り返るなりオレを手招きした。

「オレ？」

自分で自分を指差すと、

「貴久、あんたに電話」

ほらな、もういつもの声に戻ってる。

「だれから？」

「ん〜、岩上さん。……はやく出なさいよ」

そう言っ受話器を手渡してきた母さんの目がニタニツと笑ったように見えたのは 果たしてオレの気のせいだったのか？

「……もしもし。ああ、うん、明日？ え〜っと時間割どおりだった。

うん、宿題は休み中やってなかったところを全部埋めること。それだけ。うん、じゃあまた明日学校で」

「だれから？」

受話器を置いたオレに父さんが、聞いてくる。

「……っと、クラスのヤツ。明日の予定と宿題を訊いてきた」

「クラスメートか。登録しといたほうがいいな。名前は岩上……その

子の下の名は？」

「えっ、……いいよ。ケータイがあるから」

トウロクダッテ……？ ジョウダンジャネエ！

「い・わ・が・み……っと。だけど、入れといたほうが便利だろう？
ほら、貴久」

ピッピッ……登録ボタンを鳴らせながら父さんがしつこく聞いている。

知らん顔して、訊いてくる父さんの声に無視を決め込んでいると、

「お父さん、岩上さんって一人しかいないから苗字だけで解るわよ」

ひょいと顔を出した母さんが言った。

この時ばかりは、助かった……！ 本気でそう思った。

「ジュース♪、ジュース♪……」

いつものとおりの風呂上りの習慣。オレは冷蔵庫を漁っていた。

そんなオレの背中を寄ってきた母さんが、ポンとかるく叩いた。

「貸し、一個追加ね♪」

「貸し？オレ、母さんに何か借りたっけ？」

「で・ん・わ」

振り返ると にこにこしている母さんと目が合った。
目が三日月型になって、にやけて見える顔が気味悪い。

ゲゲツ、ヤッパキヅカレテタ？

「……何のこと？」

「またまた〜っ」

「もしかして、……解った？」

「あつたりまえ、ばればれでしょうが。だってね〜、連絡網の順番も違うでしょ」

「父さんには……」

「もちろん、内緒にしたいげる。知られたくないんですよ。
でも、休みの日も出掛けないで一日中家にいるところを見ると、
学校だけのお付き合い？」

内緒で味方してくれるようだし、
なにより、楽しそうな母さんの顔と声に負けた。

「うん、帰る方向が反対だから」

「それで。だったら帰りに図書館でも行ってきたさいよ」

「部活で時間がない」

「彼女って何部なの？」

「ブラスバンド」

ニコニコしながら根掘り葉掘り聞いてくる母さんに圧倒されて、オレはついつい正直にしゃべってしまった。

バカシヨウジキスギネエ?...オレッテ....

「ええ〜っ！ブラバンッ？あんたと同じテニス部だとばかり。そっか、ブラバンだったら学校だけになるの仕方ないね」

母さんが驚くのも無理は無かった。

オレの学校のブラスバンド部。

中高一貫という私学の利点を生かした練習と指導で、全国大会には毎年出場している常連さん。

だからそのために毎日の練習量も半端じゃない。

朝練、合宿も当たり前。

それに、どっちかっつと、学校は運動部よりブラスバンドのほうに力を入れてるようだし。

「それより、貴久。テストの結果だけど、彼女ってあんたより成績よかったよネエ.....」

ウッ！ナンデシッテ、イヤ、オボエテヤガンダ？

「まあ.....」

オレよりも彼女の方が成績が良かったのは事実だから、言葉を濁すしかなかった。

「彼女より、成績悪けりゃ、恥だよね〜」

ハイ、オツシャルコトハ　ゴモットモデゴザイマス
ツーカー、ナニガイイタイ……！

「真面目にやろうねえ。このままじゃクラス落ちするよ。
べつにあんたが良けりやいいけどね」

下を向くオレに母さんは追い討ちをかけてきた。
それも、極上の笑顔をくつつけて……

イイワケネエダロ！

コンナコトナラ　サイツシヨカラ　オレガデンワニデリヤヨカッタ
コウカイサキニタタズ…テカ？

「今度のテスト、精一杯、がんばらせていただきます」

そう言つてオレは、ここそと逃げ出すしかなかった。
満足げな母さんの横をすりぬけノタノタと部屋に戻る。

シカタネエ。カッコダケデモツケトクカ……

並んだ教科書に手を掛けながらオレはため息を吐きだした。

（後書き）

携帯電話ばかりの日々だけど、たまにはこういうものもいいかな？

*登場人物の名前は、電話帳から適当に組み合わせました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0502m/>

電話

2011年1月25日03時02分発行